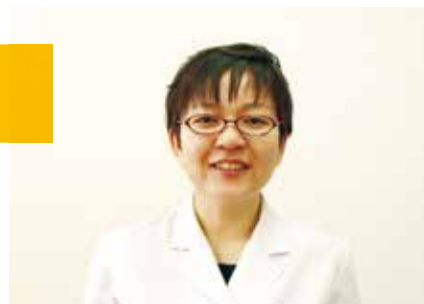


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第22回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



私にとって「薬局」の原体験となるのは、小学校低学年のときの出来事だ。自宅から歩いて20分ほど、学校へ行く通学路の中間地点あたりの大きなイチョウがあるお寺の前に、いわゆる薬店があった。

季節は覚えていないが、ある日、まだ小さかった妹が体調を崩して、夜になって熱が上がり、ぐったりしてしまった。病院で治療は受けたが、それでも具合が悪そうな妹を母と兄とで心配していたところ、ふと母が、「〇〇の薬（名前は覚えていない）があれば、少しは楽になるかもしれない」とつぶやいた。それを聞いた2つ年上の兄は、「あのくすり屋さんなら△△時まで開いているはずだ！買ってくる！」と自転車で飛び出していった。母に言われた薬と、当時、新発売でテレビでコマーシャルが流れていた「塗る風邪薬」を買ってきて、いそいそと、「これがきつと効くよ」と妹の胸に塗ってやっている情景を覚えている。

妹は、家族からとても大事にされている、大切な存在だと強く感じた。そして同時に、夜が深まる中、店内から漏れた明かりで道を照らし、困っている私たちを迎え入れ助けてくれた「くすり屋さん」は、あたたかい場所だというイメージが焼きついた。

年月を経て最近。大晦日に、母が慌てて「お屠蘇がない！」と言い出した。私自身はお屠蘇に強い思い入れはないので生返事をしていた。すると母は、「〇〇さんならあるかもしれない。あそこにはなんでもある。年末年始も開いている」と町の薬局の名前を挙げた。以前、当コラムで「薬局がお正月に開いている必要はない！」と言いきった母である。真逆の主張に内心笑いながら電話

をかけると、果たしてお屠蘇を置いているという。ちょうど残り1袋。母屋の掃除をしながら薬局は夕方まで開けているから、いらっしゃいとのこと。なんとまあ。

買いに行くと、店舗は「古き良きくすり屋さん」の風情で杖や手押し車などの介護用品が並んだ奥にカウンターがあった。店長さんに声をかけると、「ああ、電話をくれた人？」と言って、お金を払うより先にお屠蘇の袋を渡してくるような接客。山根家のお正月を守ってくれた感謝を込めて何度もお礼を言った。

最近、「ワークライフバランス」なる和製英語を聞く。「仕事と私生活の配分が適切か」を問いかける言葉だ。地域住民の生活を守る仕事をしていると、そこは曖昧になる。人の生活は24時間継続していて途切れることがなく、その中で必要とされるのだから——。一方、お屠蘇を売ってくれた薬局は、処方せんの取り扱いはほとんどしていなかった。自分の生活の地つづきの範囲で、“呼吸をするように”お店を開けておられた。

私のように終末期の患者さんと接する場合は、もう少しエネルギーがいる気がする。できるだけコールが鳴らないように事前にしっかりと準備をしつつ、それでもコールがあれば駆けつけなければならない。

私は、「住み慣れた場所で、安心して薬物治療をしてもらうための体制」をつくりたい。そして、安静時の穏やかな呼吸のようにはいかなくとも、“呼吸をするように”たずさわっていきたく願う。時に、それが自分のエゴなのか社会的使命なのか、境界がわからなくなりながらも、今日も地域に根ざした薬物治療の準備と、あと始末に明け暮れる。